
Jack of all trades

音無 無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Jack of all trades

【Nコード】

N1149BA

【作者名】

音無 無音

【あらすじ】

「何でも屋」で名のしれている彰士とちあの二人組。 そんな二人にとある依頼が ！？ 短編はコチラ【<http://ncode.syosetu.com/ss5635a/>】

case 1 ストーカー(前書き)

編集めんどくせーかったです
やめました 噛みました やめました

case 1 ストーカー

るるる、と鳴り響く電話の音。出たのは長身の二十代に入っ
てそんな好青年。

彼は吸っていた煙草を口から外し、「もしもしいー？」と酒に酔っ
たような（ていうか酔ってるんだけど）声を出す。

「……依頼だな、ああ、分かった、あ、いえ！分かりましたあゝ」

上から目線な態度が一変する。声色が気持ち悪い。

「ちあ、出るぞ」

ちあ、というのは彼・彰士しょうじのパートナーであり仕事仲間。

容姿こそまるで女の子だが彼は男。茶髪のロングストレートは地毛
である。

こう見ていると、クールな彼氏に少し童顔な彼女という恋人同士に
しか見えないだろう。

「お仕事なの？」

まあ、恋人同士に見えるときは、彼らの仕事を知らぬ間だけだろ
う。

「今回は護衛だ」

「ふーん、そう」

淡々と短くかつスピーディーに話をする二人。

「服は？」と、ちあ。

「あつちで手配してくれる」

「OK じゃ、行こうか」

「車で行くが高級車はまずいよな」

「歩いて、で」

「……」

* * *

ぴん、ぼーん…、と。恨みも込めて彰士はインターホンを押す。別段近いわけでもなくだが遠いとも言い難い…そんな微妙な距離を「まだ時間がある」「ウォーキング」という理由で（逆らうと結果が怖い）歩いてきたのだ。

当人はとても満足げだったので、怒る気もせずせめてもとインターホンに八つ当たりする情けない大人だった。

ドア…というより扉が開くのがすごく遅い。本当にしばらくしてバタバタと数人の足音。

「…玄関までが遠いんだね」

「俺たちの家もだいたいデカいけどなあ」

このうちの豪邸よりは遥かに小さいが。

「お、お待たせしました！何分、邸内で迷ってしまい…」

迷うほどの大きさである。玄関だけ見ても、一軒家一つ分…ぐらいいあった。無論比喻だが…比喻…にならないくらい。

「…お邪魔します」

「ご案内申し上げます」

「問題ないです！二人で行けます！」

「はあ！？何言ってるんのお前！！」

「うっさい。お仕事多そうですしお休みなさっていいですよー」

ひらひら、と手を振る。メイドさん達は「では、お言葉に甘えて」と言っただけで帰ってしまった。

「……おい、いーのかよ」

「大丈夫。護衛をするんだったら盗聴器おみやげあげないとね」

「…ふん」

* * *

「おお！よく来てくださったー！」

「遅れて申し訳ない。手土産をやるつか」

と、自分の手柄でもない盗聴器をどさどさどさどさと投げっていく
彰士。

目分量でも30はあるだろう。

「…これ…は…」

「盗聴器だよ。この屋敷は広いからまだあると思うけど、僕、あ、
いや“私たち”の取れる分だけ取って来たよ」

「…申し訳…ありません…」

ゆつくりと、この屋敷の主は謝った。

「謝罪なんかいらねーよ、内容をくれ」

「…わかりました」

case 2 ストーカー？

「……と言つ訳でございます」

「娘さんがねえ……」

「……はい。」

内容は、こうだった。

彼には一人娘がいて、とても綺麗で可愛くて優しくてピアノが上手くて成績優秀。

絵に描いたようなまさにお嬢様、だった。

彼女にも欠点があつて……それは、「男嫌い」。年も18。結婚も控えているのに「男嫌い」。

そして、ある日。彼女は嫌ながらも父のため、お見合いをした。きちんと断つたのだが、その相手が相手で諦めきれず財力を駆使したストーカー行為を始めたのだ。

ここまで聞けばわかると思うが、彼ら二人の任務は

『ストーカー行為から彼女を守り、ストーカー行為を止めること』。

「……だけどなあ……」

「何か……？」

「俺ら男じゃん？」

「え？ いや、でも、ちあ様は……」

「私は男だよ。女装好きかな」

「……、まあいいです。隣室に服をご用意しておりますので」

「……えーっと、まず、お嬢様に会う……か」

「それは私がする？」

「ん、頼んだ」

護衛と言えば、やはりメイドや執事。ちあはメイド服で、彰士が執事。

そして、今はその“お嬢様”の自室前である。

ちあが、コンコンと二度ほどノックすると中からどうぞと声が返って来た。

「失礼します」

女装したちあが男嫌いの少女の部屋へ一人入っていった。

(…中何があっても俺はお前を忘れな)

「きゃあああああ？ かわいいっ」

「何イーーーー!?」

あまりの驚きに、ドアを開けて入ってしまった。

「ぎゃあああああああ?!」

「うわあああああ!?!」

(・(エ) () 間 () (エ) ())

「…よ、寄らないで!! あ、あなたが新しい護衛ね… 精々死なないことね…!!」

どんな捨て台詞。彼女は、この風間家の一人娘・菜苗^{ななえ}。

「大丈夫ですよーう。私たちはお嬢様の身を守る者です。死にはしません」

「…だ、だつて私の護衛で何人死んだと…」

「11人です」

「え?」

「11人。英語で言いますよ? elevenですよ」

菜苗は、「わ、わかつてるわよ!!」と驚きと自室に男がいるという状況に震えた声を混ぜ合わせ言う。

「…どうして…」

「何故知っているのか、なんて後回しです。さ、今日は学校に行く

日でしょう」

「…嫌よ、行きたくないわ」

「……無理強いはしませんよ。じゃ、私たちは出ていきますかね。行く、彰士」

「ん？ああ、煙草吸いてえしな」

彼女が学校に行かない理由。それは単純。

“みんなを傷つけないから”。

彼女にふりかかっている“不幸”^{ストーカー}は、ただ個人情報盗んだり、後ろについてきているだけじゃない。周りに近づくものをすべて抹殺し、消した。

だから、護衛が、死んだ。

彼女は、優しいんだ。

傷つくのは苦しむのは悲しいのは私一人がいい。そうやって、
「そうやって生きてきたんだろうなあのがキは」

「だろうね。」

護衛が、守るどころか守られる立場になっていた。皮肉な話である。

「さて、ちよつくら豪邸さんの外周を掃除するかね」

「僕もする」

と、ちあは黒い長い傘を取り出した。

ちあが元々小さいのもそうだが、その傘には60センチでも55センチでもましてや70センチでもなかった。

100センチ。1メートル傘。彼はこれを用いて 戦うのだ。

* * *

庭のストーカーたちが片付いたと同時に、菜苗の部屋から彼女のものらしき悲鳴。

きつと二人を外に追いやるように外周に雑魚を並べたのは、部屋を、菜苗を一人にするためだろう。

今更気付いてなんだ、って話。

「　　ツチ！！手が早すぎんじゃねーの！？」

「　　…どうせメイドとかにでも紛れてんでしょ」

菜苗の部屋に繋がるテラスの真下に来る。

「　　…鈍ってるから行けるかな」

「　　行けるんじゃねーよ。行くんだよ」

テラスとは逆方向にある大木に向かって走る二人。

それを器用に蹴り、跳躍する。　　勢いあまり、ガラスをぶち破って入る。

「お嬢様あ？大丈夫　　」

と、問う暇もない。目の前には、ナイフを突きつけられた主の姿。ななえ

「　　…ち…おい、離せよ」

「嫌だと、言えば？」

「殺やるしかねーな」

case 3 ストーカー？

「殺るしかねーな」

「おやおや、怖い」

と、回していた手とナイフを外す。

当の菜苗ななえは肩で大きく息をしていた。相当、怖かったんだろう。

「…たーだーし」

「？」

「殺るのは、俺じゃねーよ」

「な、しまっ」

“もう一人を忘れていた”。

気配に気づいて振り返ったのは、もう遅い。

後ろには思い切り1メートル傘を振りかぶり、鬼のような形相で居る ちあがいた。

あとは一瞬。傘の“バキ”という音でなく、まるで鉛でも当たったような“ゴン”という鈍い音。

「…女じゃねーのに触んなクズ」

一字一句間違えず、二人は言った。

「…その、ありがとう」

「いや、そーいう任務だし」

「はい。問題ないです！」

「…ちよっと、男の人見直しました」

ぼつりといった言葉は、ちあにしか届かなかった。

仲間を一人殺された敵側は、数日間何の反応も見せなかった。だからこそ、警戒が必要である。

気を抜かせつつ、奇襲。それは当然の策戦であり、作戦。

あの日から、菜苗は学校に行くようになった。

きつと、二人の強さを認め安心したんだろう。いいことである。

そして当然のごとく女子校のため入校はちあだけが許された。

一人寂しく彰士しゅうじは外回りの護衛。

「しょーじー!!!」

と、玄関から駆けてくるのはちあ。

「お、おい、お前護衛……………」

「…それどころじゃない!!!」が、菜苗が消えた!!!」

「……………ああ?」

ちあの言うとおりでは、授業と授業の合間。つまり、休み時間に消えたのだ。

ちあが護衛を怠ったんじゃない。その護衛を上回るほどの 技術。

「…ち、今回は手強いぜ」

ぴ、ぴ、と自分の携帯をいじる彰士。と、それを覗き込むちあ。

あらかじめ、発信機をつけておいたのだ。無論秘密だが。

「いた! 尋常じゃねえ速さだな…? って、あれ? 俺らの…上?」

と、上を向くと

ばらばら、とヘリコプターが飛んでいた。

「つくそ!!! ちあ! 撃ち落とせるか!？」

「え、やだ。出来るけど、傘無駄になる」

「つくそ!!!」

いろんな意味で怒りの混じった「くそ」を吐いた。

* * *

発信機に導かれ、たどり着いたのは廃工場。

まるで、二人をここで待っているようだった。否、誘っているんだろ。

「いいか、遅れたら蜂の巣だ。」

「いつせーの、で！、で走るんでしょ。」

「ああ、いつせーの…で！」

二人が全く同じ速度で走り出すと、銃弾の雨。ちあはそれを“傘でなぎ払っていく”。

建物の中に入ると、ロープに縛られた菜苗と犯人、否、見合い相手がいいた。

「お疲れ様、ボディーガードさん」

「なめてもらうと困るぜ」

「そうだよ。ボディーガードは“仕事内容”。私たちの仕事は」

「何でも屋「Jack of all trades」さ」

それだけ聞くと、見合い相手の血の気が引く。

「……は…ふ…ははははは！わ、笑わせてくれる！！嘘をつくな！！」

その組織はひ弱そうなガキと二十代の男だけじゃなかったはずだ

ぞー！！」

流石に名前は知っているらしい。どれほど、有名で強いのかを。

「無理だよ」

「何がだ」

「ごめんね」

「だから…」

そこで、彼はハツとする。

“周りの気配がないことに”。 “彼らに奇襲が銃弾が当たらないことに”。

「全部、倒しちゃったんだ」

case 4 ストーカー？

「全部、倒しちゃったんだ」

「……………」

いつの間にか？それは、ほんの少し前。銃弾の雨を、雨の中をくぐってきたとき。

“ ちはは、傘で弾丸を全てなぎ払った ”

つまり、つまるところ

それは、跳ね返ったことになる。ということとは

「…は、跳ね返しつつ…当てたというのか?!」

「そう」

そして、見合い相手は、耳を澄ます。

「…………嘘だ、嘘だ…それだけじゃない…全て、全て“ 急所を外してある ”…だと…?!」

そう、“ 生きている ”。当たったのは腕や太ももなど、死にはしない場所。

ちはは、弾丸の雨をよけつつ、更に相手を狙いだが殺さず。そして自分より背が遥かに高い彰士に合わせ走る。

この行為を全てやってのけたのだ。

「…ひ、ひい!…!わ、わたしは一体誰を…倒そうと…」

自分の愚かさ、弱さに気付く。

「そう、そして更に。こんなちっこいちはあでも“ この程度のこと ”ができる。

っつーことは、単純に?」

「あ…こ、殺さない…で…な、なんでもする!金か!?金だな!?’
ぐぐ、と強く強く拳を握る。

「俺はもつと強いってことだよ!!!」

渾身の一発。

殴られた本人はもつと痛い、聞いている“音”だけでもだいぶ大きく、

工場が響く構造だからと言っても、その殴った音は、鼓膜を破るかとも思わせた。

「俺たちに挑むんじゃ、100年あっても足りねーよ、クズ」

こうして、タラシなもやし相手をした最強の仕事は終わった。

* * *

後日、その事実を知った彼の両親は、物凄く腫れた頬を携えた本人を連れ謝罪に来た。

これで、彼ら何でも屋の仕事は、終わり。

報酬（相手もくれたので二倍）をしっかりともらって、帰るところだった。

「ま、待って!!!」

と、二人を呼び止めたのは意外な人物。 菜苗だった。

「ひゅう」と、ちあ。

「...?何だよ。もう仕事は終わったぜ」

「ううん、...それについては、ありがとう。新しく一歩踏み出せるわ」

にっこり、笑った。本当の彼女。

不安も何もない。檻から飛び出せた自由な笑顔。

その笑顔を見て二人は安心した。

「彰土さん、ちょっと耳貸して」

「?」

言われた通りに耳を貸すため腰を下げると

「…は…」

頬に軽くキスをされた。

「……立派な女になって、貴方のもとへもう一度向かいますから」

「ちょ、あ、え……？」

「やるじゃん。見直したぜ、しょーじさんっ？」

「…るせえ!!」

まるで表情を隠す様に、煙草を吸う。

それを見て、ちあが不適に笑む。

「…きつと、菜苗ちゃんが好きになったのは他でも無い彰士の優しさ、だよね」

彼に聞こえそうで聞こえない声。

そんな微妙な声で、そう言い早歩きの彼を追った。

Case 5 女子校と脅迫

「これだけありやしばらくは過ごせるな」

と、貰った大金をニヤニヤ眺める彰士。

満足そうにコーヒーを飲んだ。

「ねーっ！見て見て！！」

「ああ？……って、ブー……!?」

目の前にいたのは女子の制服を着たちあ。だがそれは別に変ではない。

「おま、それ…女子校のじゃん!！」

「うん！なっかなか手に入らなくてねんっ」

くるり、と回ってみせた。

スカートを物凄く短く折つてあるので風で下着が見えそつだ。

「おい、回るな。」

てゆうかいくらい可愛い容姿でもな…お前…20超えてんだぞ

20超えの男には欲情しねーよ…」

「うるせえ。殺すよ?」

「低い声で言っな!！」

「まあ、それはそうとお客さんだよ」

「先に言え」

客室で待っていたのは、高校生くらいだろうか。美人な子だった。

「はいはい。どういったご用件で」

「あ、あの…私…の、先生についてなんですけど…」

「先生?」

「は、はい。私女子校に通ってるんですが…最近来たばかりの先生に…その、脅されて…」

「脅される?あ、はいコーヒーだよーっ?」

和む、というか空気を読まないちあである。

「あ、ありがとうございます…。実は、その女子校では男女交際が禁止されているんです」

「プレイベートまでかよ」

と、コーヒーをすすする。

ちあは、コーヒーをすすっている彰士の隣へ座った。

「でも、それを守ってる人なんて一年生とごく一部…。私も、付き合っている人がいるんです」

「へえー」

「……それが、その先生にバレて…」

「わお」

「バラして欲しくなければ…って」

「で、その脅迫の内容は」

と、彰士が問うと黙り込んで俯いてしまった。

そんな彼の足をちあは思いつきりかかどで踏む。

そしてなにこともなかったように、笑顔で

「無理しなくていいよ。落ち着いてからでいいの」と言う。

「てんめええええ！！いてーし！おい！無視すんな！」

「うるっさいなあ。菜苗ちゃんのこと新聞にチクるぞ」

「すいませんでした」

「あの」

「「！」「」

「お話…続けていいですか」

「構わねーよ」「いいよーっ」

「…きよ、脅迫の内容は…その先生に言われた人物を病院送りにすること…です…」

「…ひど」

「ありえねー」

「…嫌なんです！本当に…でも、でも！次傷つける相手が…私の…親友で…」

「そりゃいかんな……」

「どうか…どうか…」

崩れるように泣き始める彼女。

「…おい、ちあ…」

「はい？」

「お前…この高校の服って…」

「ああ！さつき見せた可愛いヤツでえ〜…って、ハッ！
悟るちあ。

「ガンバレ」

「うええええええ…」

こうして、ちあの子高偵察が始まった。

「あのお、その女子校って茶髪ロン毛ありですかあ」

脱力気味に聞くちあ。

「髪の毛は自由です」

「うおっし。カールかけちゃお」

女子力（笑）が発揮できる無駄なチャンスである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1149ba/>

Jack of all trades

2012年1月6日08時48分発行